

研究報告

在宅認知症高齢者の家族介護者が家族の集いに参加することの意味

松本啓子¹⁾、池田敏子²⁾、羽井佐米子³⁾、清田玲子⁴⁾

¹⁾川崎医療福祉大学, ²⁾岡山大学大学院, ³⁾旭川荘厚生専門学院, ⁴⁾元川崎医療短期大学

要旨 本研究は、在宅認知症高齢者の家族介護者が、家族の会の主催する集いに参加することの意味を質的因子探索的な分析方法を用いて明らかにすることを目的とした。毎月1回実施される集いの参加者を対象とし、1事例毎に分析を行い、カテゴリー化を行った。また、1事例毎から導き出された計6事例の分析結果を更に統合し、カテゴリーの抽出を行った。統合分析の結果、《共通体験から得られる共感》《吐露できる安心》《自分の介護の振り返り》《新たな介護観の獲得に向けた示唆》の4つのカテゴリーが抽出された。ピアカウンセリングとも言える集いに参加することの意味を検討した結果、家族介護者にとっての集いの意味は重要で多岐にわたることが分かった。集いへの参加は、介護者及び認知症高齢者双方のQOL向上につながると考えられる。

キーワード：認知症、高齢者、家族介護者、集い

はじめに

わが国の人口構造は、高齢者の増加と同様に、認知症高齢者数も右肩上がりに大きく変化している。現在では、65歳以上で10人に1人、85歳以上で4人に1人が認知症と診断されている。また、要介護（要支援）認定者について、「何らかの介護・支援を必要とする認知症がある高齢者」（認知症である高齢者の自立度Ⅱ以上）は、2015（平成27）年までにおよそ100万人増えて250万人に、2025（平成37）年には323万人になる¹⁾と見込まれている。

厚生労働省は、認知症対策の総合的な推進として平成19年度から、地域において認知症の本人と家族を支えるために、有効な支援を行う体制をモデル的に構築する推進事業²⁾を実施している。

認知症高齢者の家族介護者に関する研究は、欧米で1980年代から、負担感に関する報告として、特に Zarit³⁾の研究成果が世界的に知られている。わが国におい

ても、1970年代後半より、障害老人の介護者を対象として、評価尺度化や影響を与える要因との関連研究⁴⁾等、数多くの検討が行われてきている。

実際、家族介護者は、「第2の患者」ともいわれ、日々の介護に関する不安や負担感の中で潜在する自己の疾患や障害を抱えつつ、介護をしているという現状がある。そこで近年、その活動に幅を持たせ、介護する側の思いに寄り添える活動を基本理念としている、家族の会等のボランティア団体の主催する集いの活動が注目されている。在宅認知症高齢者の家族介護者にとって集いが、「カタルシス」や「心理的結束」等の意味合いを含む一方で、介護するエネルギーを奪ってしまう可能性⁵⁾も報告されている。しかし、「介護知識の獲得」、「相談相手・仲間の獲得」等集うことは、単なる知識や情報の普及だけではなく、同じ立場の人や介護の先輩との交流によって励まし、支え合って、介護への意欲を増進させる機能⁶⁾も見い出されている。また、家族介護に関する困難さには、長期にわたる身体的介護に加えて、認知機能障害に伴う問題行動への対応や、認知症高齢者の主体性を尊重した個別的ケア等⁷⁾があり、誰でも集える場の確保へのニーズは高い⁸⁾。

しかし、家族介護者が、どのような気持ちで集いに参加しているのか、そこに起こっている現象に着目し、そ

2010年9月8日受付

2011年1月14日受理

別刷請求先：松本啓子，〒701-0193 岡山県倉敷市松島288
川崎医療福祉大学・保健看護学科

の意味について検討した報告が未だ数少ない。家族介護者が集いに参加することの意味を明らかにすることで、ケア介入時に患者のみならず家族介護者にも寄り添う支援に繋げることが可能となってくる。一方、ピアカウンセリングとも言える集いに参加することの意味を検討し、家族介護者の適切な援助を通して、認知症高齢者自身のQOLをも向上されると考えられ、その可能性の幅は未だ広がる余地があると考えた。そこで本研究は、在宅認知症高齢者の家族介護者が、家族の会の主催する集い（以下、集いとする）に参加することの意味を明らかにするために質的因子探索的に分析をすることとした。

研究方法

1. 研究デザイン

集いという特殊な場で語る家族介護者の気持ちと、その場に参加している介護経験者達がそれを理解し、関わりようとしている発言から家族介護者にとって集いに参加する意味として捉えられる現象を記述するために、質的記述的研究方法を用いた。

2. 研究対象者

毎月1回実施される「認知症の人と家族の会」A県支部の集いの参加者を対象とした。1回の実施では、1事例を対象とし、合計6回の集いに参加した。

3. データ収集方法

月に1回開催される集いに参加し、研究者らによって、筆記にて語られる内容を記した。集いの開催前毎に、倫理的配慮について紙面をもって十分な説明を行い、会話の内容を部分的に筆記することの承諾を得たうえで実施した。1回の集いの時間は2時間半程度であり、そのうちの1つの事例に絞り、30分程度の内容を該当部分のみ部分的に記録した。なお、事例の絞り込みの際には、主となる発言者1名を設定し、その発言者の内容に絡む参加者の発言を可能な限り記録した。また、1回の集いの平均参加者数は、毎回20名程度である。

4. 用語の定義

本研究では、意味を物事が他との関連において持つ価値や重要さと定義する。

5. 倫理的配慮

本研究の実施にあたり、「認知症の人と家族の会」A県支部の事務局側、会の代表者への研究の趣旨説明は、紙面を以って行い承諾を得た。また、集いの参加者にも、集いの開催毎にプライバシーの保護、研究参加の拒否可、データの厳重管理や語りの内容の部分的筆記記録等、倫理的配慮に関する説明を行い、承諾を得た。

6. データ分析方法

分析方法は、内容分析の手法を参考に類型化を進め、コード化、サブカテゴリー化を行い、抽象度の高いカテゴリーとなるよう修正を繰り返し生成した。なお、語りの内容をノートの記録から逐語記録を作成し、以下の手順で、内容分析の手法を参考にしながらカテゴリー化を行った。

1) 分析方法

- (1) 逐語記録にした語り内容は、内容要素によってデータを抜き出し、2つ以上の内容を含まないようにデータを区切り、これを基本データとした。
- (2) コード化の過程において、内容や表現、認知状態の同じコードを1つのまとまりとし、データの文脈に立ち戻りながらまとまりを比較して、類型化を行った。
- (3) 中心となる内容を反映させ抽象度の高いコードとなるよう、修正を繰り返して生成していった。
- (4) 事例1から事例6まで単独でコード化を進め、それぞれに抽象度の高いコードを抽出した後、統合させ、本来の語りの内容から反れないように配慮しながら、カテゴリーの生成を行った。

7. 真実性の確保

カテゴリー化のプロセスにおいては、定期的に看護学及び質的研究の専門家によるスーパーバイズを受けた。

結 果

研究対象者の概要は表1に示すとおりである。集いに参加することの意味に着目した分析結果は表2に示した。以下、カテゴリーは《 》、サブカテゴリーは〈 〉で表示し、研究対象者の生データは「 」で記載する。4カテゴリー、11サブカテゴリーが抽出された。カテゴリーとしては、《共通体験から得られる共感》《吐露できる安心》《自分の介護の振り返り》《新たな介護観の獲

表1 研究対象者の概要

事例	年齢	性別	被介護者（年齢）	集いへの参加の状況
1	60歳代後半	女性	配偶者（60歳代後半）	継続参加
2	60歳代前半	女性	配偶者（60歳代後半）	初回参加
3	60歳代後半	女性	配偶者（60歳代後半）	初回参加
4	60歳代後半	女性	配偶者（60歳代後半）	継続参加
5	60歳代前半	女性	配偶者（60歳代後半）	継続参加
6	60歳代後半	女性	配偶者（60歳代後半）	継続参加

表2 集いに参加する意味

サブカテゴリー	カテゴリー
受け止めてもらえる気持ち 同様の体験談からの共感 支持的な態度での寄り添い	共通体験から得られる共感
集いだから話せる 現実の惨めな気持ち 他者には言えない辛さ	吐露できる安心
被介護者への気遣い これからの介護対策の模索 これまでの介護の振り返り	自分の介護の振り返り
介護観の性差への気付き 気分転換から生まれる介護の余裕	新たな介護観の獲得に向けた示唆

得に向けた示唆》が抽出された。

《共通体験から得られる共感》については、サブカテゴリー<受け止めてもらえる気持ち><同様の体験談からの共感><支持的な態度での寄り添い>で構成されていた。

「信頼できる人に言うことが大事」や「状況がわかってももらえる経験者の人に相談したい」等の語りがあった。集いで、信頼できる他者や同じ介護経験をした先輩に語り、相談することで気持ちを受け止めてもらうことの重要性が語られており<受け止めてもらえる気持ち>が抽出された。また、「…なったものでないとわからない」「今しゃべられた事は、全部私は体験しています」「皆離れていく。寄ってくる人はいない。なった者でないとわからない」等の語りがあった。同じ体験をした者同士、内容を全て語らなくてもほぼ理解できる体験者同士で語ることでこそ得られる共通認識や交流における淋しい体験など、それを現実に体験した者でなければわからないという語りであり、<同様の体験談からの共感>が抽出された。さらに、「(今までは書類の整理はできていたのに…今は、昼も居眠りをしたり、横になることを拒んだり…体をキーンとしてみたり…興奮するのだろう)…そ

おいう事あるよね。かといって注意するとよけい不穏になるし。不安が強いのだろう。医師と相談して、新聞や雑誌を持って行ってはどうか。…取り上げてしまうよりはいいと思う」や、「(介護者の病気や怪我で急遽、被介護者が慣れていない施設へ入所しなければならなくなった時に、入所先で拒食などの症状が出た…)…初めての施設でも認知症の人に不安を与えないで介護するのがプロのはずなのに。介護者が倒れた時に安心して頼ることができるのが公的保障のはず」等の語りがあった。語りの内容をあくまでも支持的に受け止め、可能性を示唆することや、相互の語りの中で、思いに同調し、その意見に支持する意思を表しており、<支持的な態度での寄り添い>が抽出された。

集いに参加することで、状況を開示し、介護する日々の中で起こるさまざまな葛藤などを同様の体験をした先輩介護者や今まさに介護奮闘中の者同士が語ることで、真にわかってももらえるという気持ち等、同じ体験をしている介護経験者達から聞ける体験談を通しての共感としての意味が示されていた。

《吐露できる安心》については、サブカテゴリー<集いだから話せる><現実の惨めな気持ち><他者には言えない辛さ>で構成されていた。

「ここへ来ると話せる」、「ここでしか言えない」や「今は笑顔で言える」、「この会に入っているとと言える」、「このようところで話すと良い意見が出てくるので、何でも聞いたらいいんです」等の語りがあった。集いという場だからこそ、この場で話せる。この場でしか話せない。このような場所だからこそ、しっかり話して、良い意見をもらって帰れば良いという思いを表現しており<集いだから話せる>が抽出された。また、「何でこんなことになったのかと思えば辛い」、「記憶にない。そのことが情けない」や「歩くときは前屈み、専門家もお手上げなのか、諦めない気持ちを持ちたいが、医学が進歩してもこの病気の辛さ…しょうがないわ」、「毎日が変わらない日々…打つ手がないのが虚しい」や「変化に対する対応は、日々変わっていくということでは、暗いトンネルの中に入っている気分…なんですね」等の語りがあった。認知症介護という現実を考えると辛い気持ちが再燃してくる。被介護者の認知症症状ではあるが、覚えていないという事実は情けない。医学的介入にも画期的な介入方法が明らかにされているわけでもなく、虚しい。そのようなどうしようもない気持ちを語っており、<現実の惨めな気持ち>が抽出された。さらに、「親族が、世間体が

悪いと言った」や「心の辛さは言えない。(被介護者は)どこも変わらないように見えるけどと言われる。それが介護する者の苦しさ」,「夫の里は〇〇。〇〇軒ある。昔から住んでいる人たちではない、寄り集まっての町内。…町内の人に言えないのが辛い」等の語りがあった。親族にさえも、本音を話すこともはばかれるという現実や、真の苦しさや葛藤を、経験がない他者は、理解できず聞き流すこともある。新興住宅地など、寄り集まりである地域などは、付き合いも浅く、本音で語り合えなかったり、協力してもらいたくても、言えない等の地域性も語られていた。そこで、これらから<他者には言えない辛さ>が抽出された。

同様の経験者だからこそ話してもかまわない、経験者達の集いであるという話しやすさ、葛藤や日頃の悩みを吐露しても良いという安心して話せる場としての意味が示されていた。そして、介護の現実を突きつけられ、惨めな気持ちを感じたり、地域性や、状況によっては、語りたくても語れない、応援してもらいたくても、要請できないといったジレンマを感じ、それを辛いと表現していた。話せること、語れることはカタルシスであり、すなわち吐露できる安心として示された。

《自分の介護の振り返り》については、サブカテゴリー<被介護者への気遣い><これからの介護対策の摸索><これまでの介護の振り返り>で構成されていた。

「もっと活かしてあげる方法はないのか。私の心の中で何とかしてお父さんにしてあげたい。皆の手を合わせてできたらいいなと、心の中で思って」や「主人が家に閉じこもっているのがかわいそう」等の語りがあった。被介護者である夫に対して何かしてあげたい。介護者たちの力を合わせたい。認知症症状から、家に閉じこもっている夫を見るとかわいそうに感じるというような気持ちが語られており、<被介護者への気遣い>が抽出された。また、「少しでも明るさのある老後と思うが、無理なんだろうか…」や「がんだったらがん保険が利く。入院したら出るが、家での介護は無理。…長いが何も保険がない」,「ポイントポイントで援助が入るといい」等の語りがあった。今後の生活を考えた時に、明るさをあまり感じない。認知症はがんと違って、専用の保険もなく、行政などからの支援体制を確立して、認知症の特徴を踏まえた援助をして欲しいという希望であり、<これからの介護対策の摸索>が抽出された。さらに、「家で1人でいろいろ考えて神経が張り詰めていた時より、ここに来ると楽と言ったら語弊があるが…」等と語り、こ

れまでの介護を振り返り、思いなおしてみると、集いで語ること、交流を図ること等を通して、気持ちが楽になっていることに気付いており、<これまでの介護の振り返り>が抽出された。

集いという場で、自分の介護の現状を語ることで配偶者など被介護者への気遣いを再認識することや、これからの介護対策へ向けて模索や検討をしていた。それらを通して、自己の介護の振り返りに繋がっていた。

《新たな介護観の獲得に向けた示唆》については、サブカテゴリー<介護観の性差への気付き><気分転換から生まれる介護の余裕>で構成されていた。

「女性と男性の場合の介護は違うのだろう。男の立場ではそこまで気にしない。…男は割り切って、遠くの親戚より近くの他人…」等と語り、女性と男性では介護に対する援助体制のニーズや、援助要請行動に差があると感じていることから、<介護観の性差への気付き>が抽出された。また、「ひとつ楽しいことがあって、習い事を始めたんです…すごい気分転換になる…」等と語り、苦しく辛い介護の中ではあるが、自分の気分転換になる楽しみを見つめることができている場合もあり<気分転換から生まれる介護の余裕>が抽出された。

介護観という視点で、他者の語りを聴くことで、今まで自分は考えもしなかった性による差の有無等も新たに気付き、また介護へ向かう新たな気持ちへの気付きを通して、自己の介護観の成熟へ向けて示唆を得るという意味も示されていた。

考 察

介護者は「集い」の場において被介護者の介護状況を報告する。その中で、自己の受けたストレスとも言える出来事をナラティブに語る。やりきれない気持ちや模索している状況を吐露することができる。このような語りの中から、家族が折り合いをつけ、立ち直ってゆく過程を松村ら⁵⁾はカタルシスや浄化と捉えている。本研究でも同様の意味が見出された。また、介護者が集いに参加し、状態についてさまざまな状況報告をすることに対して、集いの参加者達は、その情報から現在の状況について分析を加え、解決策の提案、介護者の行為については支持的態度を表明している。介護者にとっては、支持を得たことで、自身の行為を確認するコーピングの第1段階になってゆくとも考えられる。語るという相互行為の中で、情報の提供や提案を受けている。介護者は、「集

い」の場において被介護者の状況を客観的に述べる。そのことを通して介護の振り返りができ、負担と感じていた状況も認知症の症状の経過過程であり、今後どのように進行するかイメージ化が可能となっている。今を如何に対応し、穏やかに生活していくかといった方向性を見出すきっかけにもなると考えられる。また、語る中で、感謝や迷いや気遣い等、介護者自身の心の葛藤を吐露する。介護の負担等、共有できる問題の提示を行いながら、枯渇している情報に関する問いかけも行う。問いかけに対して、他の参加者は、各自が経験したことをもとに応じられる最大限の情報提供をする。一方、語っていくなかで、不満を表出するだけでなく、介護観として、あるかもしれない性差という気付きもみられた。気分転換活動等余裕を語ることで、自己のQOLの維持向上への新たな示唆も得ている。

「集い」という場に出てきた内容はさまざまであるが、介護生活での迷いや配慮など人間対人間としてのお互いを気遣う気持ち、ややもすれば感じてしまう負担感を語っている。そこでの語りや感じ方には、男性と女性では異なるのではないかという疑問も感じている。また、話せる場であるからこそ、介護者は思いを語るが、介護経験者の先輩達もしっかり語っている。そこで起こっているコミュニケーションは受容と共感が根底にあることによって、それを認識した介護者たちは集いを心の糧として、継続して参加するとも考えられる。佐分ら⁹⁾は集いにおける受容と共感、家族介護者の介護への適応を促進させ、集いへの参加も継続的な方向へ促すように影響を与えていると述べているが、現段階では実証的には分析をされていない状況である。家族介護者にとって集いに参加することの意味の中にある受容や共感などが、介護生活への適応を促す方向に作用しているかどうかその関連をこの調査から述べることはできない。しかし、集いの現場に家族介護者が参加することの意味を分析することで、共通体験のある者同士が語る相互の交流から得られる共感や、ピアカウンセリングとも言える集いの場で何でも吐露できるという安心な気持ち、そして語ることで自分の介護を振り返り、また、場で語られる内容から新たな気付き等の刺激を受け、介護観の構築へ向けての示唆が得られる等、集いへの参加の意味は重要で多岐にわたることが明らかになったと言えよう。今回の結果を踏まえて、家族介護者を理解し、寄り添う態度で支援していくことが必要であると考え。集いへの参加は家族介護者のQOLの向上に繋がり、ひいては認知症高

齢者自身のQOLをも向上できる可能性が大きいことが示唆された。

なお、研究の限界として、今回の研究対象者は6人と少なく、全事例について被介護者が配偶者であること、またその立場が妻であったことがあげられる。つまり対象者が全員女性であるということから、ジェンダーの視点からの性差に関する分析についてはできない状況にあった。今後事例を増やし、対象者設定の幅を広げる等の検討を加えることで、より一般化できる分析へとつなげることが望まれる。

文 献

- 1) 厚生労働省：介護保険制度改革の概要－介護保険法改正と介護報酬改定－パンフレット，厚生労働省，1-2，2006。
<http://www.mhlw.go.jp/topics/kaigo/topics/0603/index.html>
- 2) 厚生統計協会 編：国民衛生の動向。初版，厚生統計協会，100-117，2007。
- 3) Zarit, S. H., Reeve, K. E., Bach-Peterson, J.: Relative of the Impaired elderly: correlates of Feelings of burden, *The Gerontologist*, 20(6), 649-655, 1980.
- 4) Matsumoto, K., Kirino, M., Nakajima, K., et al: Measurement and the Criterion-Related Validity of Care-Related Needs of Family Members Caring for Demented Elderly Patients at Home, *Kawasaki Journal of Medical Welfare*, 12(1), 29-36, 2006.
- 5) 松村ちづか，川越博美：在宅痴呆性老人家族介護者にとっての家族会の意味－家族介護者の人生観・介護観・家族会へのニーズとの関連－，*聖路加看護学会誌*，5(1)，1-4，2001。
- 6) 帆苺由紀，佐々木明子，斉藤明子：痴呆性高齢者の介護者の介護体験と「家族の会」の果たす機能，*山形県公衆衛生学会第25回講演集*，25-29，1992。
- 7) 天谷真奈美，大塚真理子，島田広美 他：痴呆性高齢者を介護する娘介護者の危機，*埼玉県立大学紀要*，4，87-93，2002。
- 8) 大森恵理子，木村里世，佐野由季 他：認知症高齢者をかかえる家族介護者の「つどい」への参加の意味 家族介護者のニーズに着目して，*日本看護学会論文集地域看護*，37，240-242，2007。
- 9) 佐分厚子，黒木保博：家族介護者の家族会参加にお

ける3つの主要概念の関連性—共感, 適応, 家族会
継続意図を用いた構造方程式モデリング—, Japan

Society for the Social Welfare, 49(3), 60-69, 2008.

Family caregiver's meaning that gathers in meeting of the elderly with dementia

*Keiko Matsumoto*¹⁾, *Toshiko Ikeda*²⁾, *Yoneko Haisa*³⁾, and *Reiko Seita*⁴⁾

¹⁾*Department of Health Science & Nursing, Kawasaki University of Medical Welfare, Okayama, Japan*

²⁾*Okayama University, Graduate School, Okayama, Japan*

³⁾*Asahigawasou Medical Welfare Academy, Okayama, Japan*

⁴⁾*Department of Nursing Kawasaki College of Medical Welfare, Okayama, Japan*

Abstract The purpose of this study was to search for the meaning of participation in the meeting of family caregiver of the dementia elderly. This study was a qualitative research, and the subjects were 6 family caregivers.

4 categories for the meaning of participation in the meeting were identified :
Sympathy obtained from common experience, Safety that can be revealed, Looking back on my nursing,
Suggestion in acquisition of idea of new nursing.

The clarification of the meaning of participation in the meeting of family caregiver with dementia elderly could contribute to the construction of a renewed family caregiver of the dementia elderly image and the further understanding of the family caregiver in the areas of medicine and nursing education.

Key words : dementia, elderly, family caregiver, gathering